

生きてはたらく言語能力を高める工夫
～他教科、日常につながる喜び～

可能性を感じられる指導の工夫・改善

五年生での実践

提案者 高山市教科研究会 小国部会

発表者 水尻（白川村立白川郷学園）

一 テーマ設定の理由

学力状況調査をはじめとした各種調査結果では、「国語が好き」な児童生徒の割合の低調が続いており、強い危機感を抱かずにはいられない状況である。高山市教育研究会小国部会では、他教科の学習や日常生活において、身につけた言語能力を活用しているという実感、喜びを得ることが、現状を打破し、より多くの児童に深い学びをもたらすと考え、他教科、日常とのつながりを念頭に置いた「生きてはたらく言語能力」を高める指導の工夫改善に取り組んだ。

二 研究仮説

めざす子どもの姿を明確にし、魅力ある単元構想を描きながら、仲間と協働して答えを吟味する場を自己選択できるように設定すれば、日常につながる児童に生きてはたらく言語能力を育むことができる。

三 研究内容

(一) 魅力ある単元構想の工夫

①めざす子どもの姿の具体化

②魅力的かつ必然性のある学習活動

(二) 仲間と伝え合い、自分の考えを深めることができる発問や場の吟味・工夫

四 研究実践

実践Ⅰ 単元名「表現を工夫して、俳句を作ろう」

日常を十七音で

実践Ⅱ 単元名「伝記を読み、自分の生き方について考えよう」

やなせたかしーアンパンマンの勇氣ー

(一) ①めざす子どもの姿の具体化

学習指導要領に示された書く指導事項の指導内容をもとに、単元で「どんな力を身につけてほしいか」を意識して具体的な指導内容を設定した。それにより、単元中の単位時間ごとの役割が明確になり、魅力ある単元構想の構築に役立ったほか、単元を貫く課題づくりにも有効に働いた。実践Ⅱでは、それを表にまとめ、整理することで効果を高めた。

(一) ②魅力的かつ必然性のある学習活動

単元導入時に教師の作成した伝記の紹介カードなど良モデルを提示し、児童の気付きや思考を大切に学習活動を展開した。特に、実践Ⅰでは、俳句の材料集めで日記を活用し、日常とのつながりを児童に意識づけたり、表現の工夫に児童が愛着をもてるネーミングを採用したりして俳句を身近なものとしてとらえられるように工夫した。一つの実践共に、単元末には成果物があり、仲間や教師から認められる場を設けることで意欲向上を図った。

(二) 仲間と伝え合い、自分の考えを深めることができる発問や場の吟味・工夫

自分でじっくり考える、仲間や先生と考える、関連本を利用して考える三つの対話の場を自分で選択できるようにした。また、対話にICTや付箋の活用、ワークシートを黒板に貼り出すなど、考えを共有し、アドバイスを受け入れやすい場としたほか、教師も児童の考えを把握し、対話をファシリテートしやすいようにした。

五 成果と課題

○単元構想の段階でめざす子どもの姿を具体化することで、単位時間の役割を明確にすることができた。それにより学習活動が精査され、児童の学習意欲が高まる魅力的かつ必然性のある学習活動の創造に生かされ、魅力ある単元構想が可能となった。

○仲間と伝え合い、自分の考えを深める対話の時間を吟味し、対話が進むような工夫を重ねることは、学びが深まることはもちろん、学び合い、自らを深めようとする主体的な姿につながった。

●対話の場は充実したが、対話の質を向上させる手立てが必要だと感じられた。対話の視点を精査して、焦点化された対話にすることや、表現力の未熟な児童でも可能な交流や評価の方法の工夫についてさらに研究を深めていきたい。